

# 図書館通信 —91—

1990. 3

## FRESH and TRY

### — 新入生特別号 —

- 大学図書館とは..... 1
- 新入生に
  - 摩擦の科学 / 田中 昭..... 1
  - 「三郎」の青春 / 森本隆子..... 2
  - 原書を読もう / 八木達彦..... 3
  - 「青春」はワンダーランド / 大江泰一郎..... 4
  - コンピュータ時代の図書館 / 近田文弘..... 4
  - 新入生に読んで欲しい本 / 岡部満康..... 5

### Questions and Answers

## 大学図書館とは...

■ 入学おめでとうございます。中学校が、それまでの小学校とは異なり、高校も中学校と違っていたように、大学も勿論、高校とはいろいろな面で違ってきます。多くのことがあげられますが、図書館は、その最たるもののひとつ、といて差しつかえないでしょう。

### 図書〈室〉ではなく〈館〉である。

- ▶ どんない点が、高校までと違うんですか？
- まずは、コトバの遊びではありませんが、名

新入生に

### ◎新入生にすすめる本

「摩擦の科学」 河野彰夫 著

(ポピュラーサイエンス、裳華房)

A5 99頁

田中 昭

人が歩けるのも摩擦のおかげであれば、酒の入ったコップを口へ運べるのもコップと指との間の摩擦のおかげである。そういえば燗をつける電熱器の発熱も摩擦なそう。言われて見れば身の周りのあらゆるところに摩擦がある。余りにも身近過ぎて、とても学問になるとは思えない。

本書の著者はそこに目をつけたのである。まことに慧眼であると思う。科学技術が発達し、もはや学究すべきこともそう多くは残されていないなどと考えている人がいたら、それは間違いである。固定観念を捨てて世界を覗けば、謎や疑問は深まるばかりであろう。そう言いたいには違いない。

摩擦も大きな学問分野に育ってきた。今やそれを制御できるようにまでなった。大学に学ぶからにはそうした先人の結果だけを理解するのではなく、その発想、その思想を学び、活かすべく努力しなければならない。

(電子工学研究所・電子デバイス)



新入生に

## 「三四郎」の青春

森本隆子

2が消えた。あとから3が出る。其あとから4が出る。5が出る。とうとう10迄出た。すると度盛がまた逆に動き出した。10が消え、9が消え、8から7、7から6と順々に1迄来て留った。

夏目漱石の小説「三四郎」の一節である。熊本の高校を卒業して上京した三四郎が、初めて東大のキャンパスへ足を踏み入れた場面である。理科棟地階の穴倉のような研究室では、野々宮さんという先輩研究者が、光線の圧力などといういかにも難しそうな課題に取り組んで、望遠鏡の目盛をいじくっている。引用は、その場面、いわば三四郎の学問の世界との出会いである。

ここを読むたびに思い出すが、我が静大図書館である。土地の勾配を利用して建てられた静大図書館も、正面入口から入ればちょうど4階。書庫に入ろうと思えば、司書の方達の了解を得て、やはり地階へともぐってゆかねばならない。エレベーターの目盛が4、3、2、1と刻まれてゆく、そのやや退屈な時間に、私は思わず上の一節を反芻している。3階は雑誌、2階は社会系、1階が自然、文学など。やや暗めの電灯にひっそり照らされた無数の本たち

との出会いは、三四郎の場合にも増してスリリングであるにちがいない。

但し、良書との出会いには、良き導き手が不可欠だ。三四郎は、幸い広田先生という良師に恵まれた。作中、三四郎は広田先生に導かれて様々な本との出会いを持ち、それ以上に、先生の書物談義は20世紀文明への批評性を有して、三四郎に存在の不安や恐ろしさを悟らせる。古今の哲学書を原書で読破しながら、一篇の論文も世に問わない先生を、人は「偉大なる暗闇」と呼ぶが、しかし先生のこの世間に対する沈黙の意味は深い。「気を付けないと危険い」と日本の未来に警告を発し、「日本より頭の中の方が広いでせう」とうそぶく先生の存在は、昼寝と読書三昧に明け暮れているようで、実は、フワフワと恋に浮かれる三四郎を案外深く捉えている。私は、若いみんなに先生の傍観者的態度を勧めるわけにはゆかないけれど、この軽薄短小の時代にあつて、先生の悠揚迫らざるクールな眼差しに、却ってより多くひかれる。

新入生諸君は、これから始まる4年間の大学生活で、いったい何冊の良書、何人の広田先生に出会うのだろうか。(教養部・日本文学)

前が違います。図書室ではなく図書館です。高校までですと、ごく一部の非常によく整備された高校を除いて、独立した建物、ということはないと思います。まして、専任の職員が20人以上もいるところは絶対にない、と断言したいと思います。

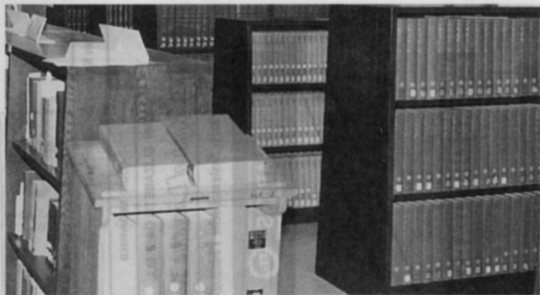
▶ そんなに多くの職員がいるんですか……。

■ 各職員の仕事が専門化されていて、例えば利用者からの質問等を受けることだけを仕事としている係——参考調査係というんです——があります。

## 参考調査係(レファレンス)とは?

▶ どんな質問を持っていてもいいのですか?

■ 基本的にはO.K.です。ただ、念のためにいっ



ておきますと、通常は、質問に対して、そのものズバリの回答はしません。たとえば、ある人物の誕生日はいつか、という質問に対しては何年の××月××日という答えではなく、××という人名事典を調べたらよいでしょう、といった返事になります。もちろん、ケース・バイ・ケースで、どうしても、という時には、1954年3月21日、といった回答をすることもありますが……。

▶ 答えを得るための、ヒントというか、方法を教えていただけるということですか?

■ そうですね。4階メインフロアに、約9千冊の図書が並んでいますが、それらは参考図書といって、調べものをするための本です。本ごとに使い方が異なりますので——中には、きわめて特殊な使い方をするものがあります——まずは、それらの使い方のお手伝いができたら、と思っています。

本図書館は、約60万冊の図書と、1万種以上の雑誌(注1 6ページの「役立ち情報」を参照してください。以下同じです)を所蔵していますが、新入生諸君が、それらの資料全体に対して的確にアクセスするのは、相当な困難を伴うと考えられますので、私達図書館職員は、その手助けをしな

くてはならないと考えています。

## どこにある？60万冊!!

▶ いま、60万冊とおっしゃいましたが、そんなに多くの本があるとは思えません。4階の本、参考図書というんですか、それが9千冊だとすると、5階の本が、その10倍以上の10万冊もあるとは考えられませんが……。

■ 5階を開架図書室といいますが、そこにある図書は、約6万冊です。参考図書の約7倍になります。一般の学生が日常的に利用するのは、今、話題に出ている4階と5階だけですので、それが本図書館のすべて、と思いがちです。しかし、建物全部が図書館です。1階から3階までは、実は書庫になっています。本の倉庫とでもいったらいいでしょうか。そこに残りの図書が収蔵されています。それを加えると、60万冊となります。

残念ながら、一般の学生は、書庫に入ることはできませんが。

▶ 書庫の本は、見るのができないんですか！

■ そんなことはありません。館内で見ること、閲覧といいますが、閲覧も館外貸出もできます。カード目録(注2)やコンピュータの利用者用端末(注3)が、そのためにあります。

カード目録で、カードの最上部に「開架」なり「参考」なりの表示がなければ、それは書庫に置いてある図書ということになります。端末ですと、配架の欄に「閉架」とあるものが、それです。

運用係カウンターの前の記入台に「図書貸出票(出納)」「図書閲覧票」がありますので、どちらか希望する方に、必要事項を記入して、カウンターに申し込んでください。すぐさま、係員がもってきてくれます。

▶ めんどくさそうですね。

■ 確かにその通りですが、ぜひ慣れていただきたいと思っています。60万冊のうち約20万冊が外国語の図書ですが、目録をひかないかぎり、それらに接することができないからです。また、雑誌も、ほとんどが書庫ですし、外国語の雑誌については、3階の自然科学系外国雑誌室を除けば、ほぼ100パーセントが書庫にあります(注4)。

外国語の図書、そして外国語の雑誌を数多く所蔵していることが、大学の図書館と高校までの図書室の、何よりも大きな違い、ということが出来ます。

## 外国の文献はオリジナルなカタチで……

▶ 外国語のものといえば、高校の時に先生から聞いたのですが、大学に入れば、例の常温核融合の最初の論文を簡単に手にすることができる、と

のことでしたが？

■ その通りです。3階の「自然科学系外国語雑誌室」に行けばわかりますが、数学と物理の分野だけでも、200を超える種類の外国雑誌を購入していますので、重要な、基本的な論文はたいてい手に入る、と行って差しつかえないでしょう。

実際、常温核融合の件に関していえば、新聞などで騒がれ始めた時点で、すでに、そのレポートを収録した雑誌が、本図書館に到着していました。

海外の文献を、原語のままのオリジナルなカタチで、しかもタイムラグをできるだけ少なくして収集する——高校までにはない、大学図書館ならではの特色です。

新入生に

## 原書を読もう

八木 達彦

原書とは訳書の元の本のことだが、一般に訳本が出てなくても外国語の書籍を指す。受験勉強から開放されたフレッシュマンに原書を奨めても難しすぎると敬遠されそうだが、興味あるテーマの本さえ見つければ十分にトライする価値がある。

化学を専攻しようと心に決めたころ、たまたま Fieser の Textbook of Organic Chemistry (1952年版, 741ページ) が目にとまり、どのくらい分かるか試しに読み始めた。当時の550円はかなり思い切った買物である。教科書・参考書以外の英語はもちろん初めて。受験勉強で鍛えてあるはずなのに知らない単語が続出し、すぐに飽きて1日1ページも進まない。いつになったら読み終えるのか弱気もでてきたが、有機化学は好きだったから、その興味で何とか続けられた。読み進むうちに辞書をひく回数が減り読書スピードがあがる。専門書は意外と文章が単純で、誤解を誘う意地悪構文が少ない。あるページを辞書なしで読み通せたときの喜びは今でも忘れられない。1年かかったが有機化学の知識だけでなく英語が怖くなくなったことが大きな収穫だった。

今では外国語の書籍は種類も豊富だし値段も割安だ。専攻しようと決めた分野の原書を探し出したら読むことだ。興味あるテーマなら必ず読み通せる。どんな本がいいか迷ったら図書館の参考調査係に相談しよう。きっと良い本を見つけてくれるに違いない。辞書(英和)はいろいろな分野の専門用語が豊富なリーダーズ英和辞典(研究社)を奨める。

(教育学部・化学)

新入生に

## 「青春」はワンダーランド

大江 泰一郎

私は、もう青春を取り戻せない年の人間です。その私に、「青春」とは何か、と仮に問われるなら、少しも迷わずに、「知的冒険をする時間だ」と答えるでしょう。

「勉強してくれ」とは、いいません。だって「知的冒険」は、皆さんが知っている受験勉強のように退屈なものじゃなくて、一度そこに首を突っ込んだら夜寝る時間も惜しくなるような、ワクワクすることなのです。問題はその「冒険」のワンダーランドへの入り口を、どこで見つけるかです。

人文の法学科や経済学科の学生だったら、教養の1年でやる基礎ゼミが、その「入り口」を教えてくれるはず。一般教養の講義にだって、語学の授業にだって同じことでしょう。「分からない」「なぜだろう」が、実はその「入り口」なのです。「入り口」が分かったら、後は自分の「なぜ」を頼りに「本を読む」ことが、ワン

ダーランドへの通路になります。「知的冒険」の世界には、試験もないし、なんの規制もありません。何を読むか、も決まってはいません(名著や推薦書などくそくらえ!)。ただ「面白い」方に向かって、古今東西をタイムマシンで縦横に走り回ります。自分が納得できるまで「本を読む」しかありません。「本」がこの世界のサヴァイヴァル・キットなのです。

多くの学生の皆さんには、人生でこの4年間しか、その「時間」と「本」がありません。それが、つまり「青春」がいま図書館にあるのです。それを見逃して、あとで後悔する手はないでしょう。夏休み頃までに、この「冒険」の世界にいる自分を発見したら、その時が、これを読んであなたの本当の入学式になるでしょう。そのとき、私もいいましょう。「おめでとう」と。(人文学部・比較法)

## 参考調査係とは、PART 2

■ 外国語の図書20万冊という数字は、県内随一ですし、全体の60万冊という数字も、多分、同じように考えてよいでしょう。とはいっても、それ

だけで勉強あるいは研究に必要な資料を、すべてカバーしているとはいえません。

違いの3つ目。大学の図書館は、自館だけで完結していない、ということでしょう。

▶ 完結していない?

新入生に

## コンピュータ時代の図書館

近田 文弘

新入生諸君は教養部中庭のイチヨウの新緑にしばし勉学の疲れを癒す思いがするかも知れない。イチヨウは他の多くの種子植物とは違って、受精時に鞭毛を備えた精子が水中を泳いで卵に到達するしくみになっている。このことは植物の進化を考える上で大変重要であるが、それを発見したのは平瀬作吾郎先生である。先生は明治29年に東京植物学会で口頭で発表し、その内容を植物学雑誌で日本語で発表した。当時の日本の学会は、極東の小国で呱呱の声をあげたばかりであったが平瀬先生の発表は、やがて、欧州をはじめ世界の学界で認められることとなった。

イチヨウのこの研究は、重要な情報というものは、明治時代という古い時代にあつて、日本語で発表されたものであつても世界のレベルに広がり得るものであることを示している。しかし、その情報が伝わる早さは必ずしも早くはなかつたであろう。やがて、と表現したが、それ

がどれ位の時間であつたか定かではない。

ところが、最近の5年間を見ると、情報の伝わり方が以前とは比べものにならない位早くなってきていることに気づく。この情報伝達にコンピュータが重要な役割を果しており、静岡大学の図書館の情報サービスもこの点において様変わりしようとしている。図書館は数多くの図書を備えており、諸君がそこへ出向けばこれらの図書を読むことができる場所であることには相違ないのであるが、これからは、備え付けの図書をこえた世界の情報を短時間で入手できる情報ステーションとしての活用がより重みを持つてくると予想される。大学の図書館には、そのような情報入手を取扱う専門家が諸君の相談に応じてくれるはずである。さっそくながら図書館に出向いて、このような係りの方々と接触して欲しいものである。(理学部・生物学)



■ 開かれている、といった方がよいかも知れませんが。他の大学等の図書館とのネットワークを非常に大切に考えているからです。

参考図書9千冊のうちの大きな部分を、書誌、目録類が占めています。本図書館で所蔵していない図書や雑誌についての情報ですね。そうした資料にアクセスする方法をシステムチックに備えています。

たとえば「日本書籍総目録」、これを見れば、現在、わが国で市販されている図書が、すべてわかります。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、中国についても同じようなものを備えていますし、他の国々についても、できるだけ情報が得られるように、との姿勢をとっています。

▶ アメリカで、今どんな本が出ているのか、わかるんですか？

■ そうです。それだけではなく、過去にさかのぼってもわかります。

▶ じゃあ、100年前に出された本もわかるんですか？

■ 多分、わかると思います。さらに、現在、どこに行けば、それを見ることができののかについてもわかります。

国立国会図書館の蔵書目録類、「新収洋書総合目録」、「学術雑誌総合目録」といったもので調べていただければ、内外の図書・雑誌の、国内での所蔵がわかります。静岡にいて、それが東京にある



のか、大阪にあるのかがわかるわけです。

▶ どうしても必要な本が静大にないときでも、まず静大で大体のことを調べてから、東京なり大阪の図書館へ行けばよいわけですね。

■ 行く必要もないと思います。というのは、現物あるいはコピーを取り寄せることをやっているからです。参考調査係で申し込んでください。まさきほど、あえて、完結していない、といういい方をしたのは、このように、たとえば東京にしかないものを、東京にあることがわかるだけではなく、出向がなくても見ることができる、という

新入生に

## 新入生に読んで欲しい本

岡部 満 康

大学への入学が許された30年もの昔、私はまるで長い間の飢えをいやすかのように文学書を読みあさったのを覚えております。高校時代は今も変わらぬ受験勉強で本らしい本を読む事はほとんどなかったからです。色々手あたり次第乱読したわけですが、特に感激し、今なお時々読みかえしているのがトルストイの「戦争と平和」です。今ヨーロッパを中心に世界は激動しておりますが、19世紀初頭ヨーロッパはナポレオンの出現で政治的に非常に不安定な時代を迎えました。特にロシアはナポレオンが率いる60万もの大軍の侵入を受け、人々は平和でのどかな生活から、一転して悲惨で無益な戦争にひきずりこまれていきます。トルストイはこうした歴史的事実を背景に、小説「戦争と平和」の中に、皇帝から農奴に至るまで多くの人々を次々に登場させ、彼等の行動や言動を通して「歴史を動かす根源的要因」を一貫して追求しつづけています。彼はそれが「人間の自由意志の総和」であり、決して「歴史に、にぎにぎしく登場し

てくる英雄や独裁者の意志ではない」と断言いたします。これは、それから150年後の今日のヨーロッパを正確に言い当てていると思えます。現在のヨーロッパの動きはまさに自由を求める人々の意志の総和そのものであって、これが決して大国の意志やイデオロギーでない事は明らかです。それだけにこのエネルギーは巨大なものであり、いかなる政治権力もこれをおしもどす事は不可能な歴史的必然のような気がいたします。

朝夕のヨーロッパから送られてくるテレビニュースを見るにつけても民衆の意志こそ歴史を動かす根源的要因であると見抜いた文豪トルストイの歴史的洞察力の確かさに感服させられております。

「戦争と平和」は、激しい受験戦争を突破し、ホッと一息ついている新入生諸君に是非おすすめしたい、スケールの大きな歴史小説です。

(農学部・応用生物化学)

ことを示したかったからです。さらに、そのことは、海外についてもいえるのです。

▶ では、国内にないものは、外国から取り寄せてもらえるのですか？

■ そうです。アメリカ、イギリス、フランス、それにドイツぐらいまででしたら、すぐに所蔵の状況がわかります。わからない場合には、これらの国も含めて、直接、外国の図書館に問い合わせをします。やはり、参考調査係に申し込んでください。

さらに、コンピュータの端末から、ダイレクトに外国のデータベースにアクセスすることもやっています。

## まずは、足元から。

■ だんだん、はてしないものがたり、という感じになってきましたが、新入生にとっては、当面、自分は関係がない、と思うでしょうし、実際にもその通りでしょう。とりあえずは、以上のようなことが可能だ、ということのを頭の中のどこかにとめておいてください。

そんなわけで、話を元に戻しますが、何よりもまず、本図書館の60万冊を活用してください。実際に、自分の足元、すなわち1～3階の書庫の中に、自分のもとめる本があるのに、市内の本屋さんをかけ回り、店頭になく、大学の生協に戻って注文を出し、3週間後にやっと手に入れた、という話はよく耳にします……。

ともかく、図書館に行つて「図書館利用票」をもらい、その足で、図書館の中をひと回りしてください。きっと、面白い発見があると思います。

## (注)の名をかりた、役立ち情報

### ▶ 浜松分館も使えるよ (注1)

60万冊、1万種というのは、静岡本館の数字。本館の他に、浜松分館があり、14万冊の図書と、1,400種の雑誌を所蔵している。静大生なら、工学部生でなくても使える。分館は工学関係のきわめて充実したコレクションを持っている。浜松に所用のおり、一度は出向く価値がある。

### ▶ カード目録は、ひとつじゃない (注2)

〈ひとつじゃない〉というコトバにも、実は、ふたつの意味がある。

① 旧制静岡・師範学校等からの長い歴史を持つ静大の全蔵書をひきついでいるので、カードもそれぞれの学校単位ごとに4系統ある。第2次大戦前の本なら旧制静岡、昭和20～30年代の農学関係の本なら旧農学部図書、などと使いわけると効率が良い。

② また、それぞれが、書名順の書名目録、分類順の分類目録等に分かれている。

### ▶ 1988年度以降の本はコンピュータで (注3)

1987年度以前に受け入れた図書は、カード目録で検索する。88年以降については、コンピュータにのみ入力されているので、利用者端末によって、所蔵の有無を調べる。

書名のごく一部がわかっているならば、検索することができる。詳しくは、端末の脇に置いてあるマニュアルを参照のこと。

### ▶ 雑誌は冊子体の目録で (注4)

カード目録で出てくる雑誌は復刻版のみ。雑誌の所蔵の全容を知るには、各種の冊子目録を見ること。静岡大学の目録もあるが、いちばんてっとり早いのが「学術雑誌総合目録」で、静大での有無がわかるだけでなく、静大になければ、他大学での所蔵を調べることができる。

